

淡島神社の由来

この神社は和歌山市加太の淡島明神社より勧請されたと言われる。江戸時代淡島明神の笈を背負った勧進僧がこの秩父大道集落の元屋方に宿泊して同家の屋敷神様として祀ったのが始まりという。

この神様は安産と子孫繁栄の守護神として市内唯一の祀神であったので近郷の人々から厚く信仰されてきた。明治初期この集落に七保村役場や駐在所が設置され、次いで七保橋の竣工、田無瀬座バス発着所、七保農協の開業などにより大商家も軒を連れ七保町の政治、経済、文化、交通の中心地と発展した。昭和初期、淡島神社の祭典は七保町全域や賑岡町方面からも参詣者が雲集し、地芝居、露店も並び近郷一の賑わいを見せた。現在毎年8月15日この集落の神社として式典や子供御輿渡御、灯篭流しなどが行われ、去りゆく夏の夜の川面をあざやかに色どる。

この祭典が終ると同時にこの町に初秋の風情おとつれる。

この説明板は人々の生活を長く守り支えてきた地区文化財の由来を伝え保護するためにふるさと創生事業により建てた。平成3年12月

七保公民館

この路を通過し、浅川から棚頭へ逃げた路であると思いたい

写真・淡島神社説明看板から

「淡島神社の由来」この説明板を初めて見た時、飛び上がらんばかりに驚き、そして感動した。

その訳は、文章中の上から三行目の【この秩父大道集落の(元屋)後は、よい。】

この地に**秩父大道**という、当時で言う所の大きな路が通っていたことが大事なのである。

それは、秩父往還へと繋がっていた大きな証左と言えないだろうか

(ウキペディアから引用)

室町時代からは、都留郡(郡内地方)において平姓小山田氏の足跡が見られ、『鎌倉大草紙』や武田家諸系図では「平姓小山田弥二郎」の娘が甲斐守護・武田信満に嫁いだと記されており、戦国期の小山田氏当主と同様に平姓で「弥」で始まる仮名を用いていることが注目されている。

甲斐国では室町時代後期の明応年間に武田信昌の子である守護・信縄と油川信恵の間で抗争が発生し、「向嶽寺文書」によれば、小山田信長はこれに乗じて都留郡田原郷(山梨県都留市田原)の向嶽寺(甲州市塩山上於曾)領を横領した。「向嶽寺文書」によれば、明応7年(1498年)に信縄・信恵間で和睦が成立すると、信長は明応8年(1499年)9月に横領分を向嶽寺に還付したという。信長の花押も記されており、この時点で信長は平姓を称していることが確認されているという。

『甲斐国志』『甲斐国社記・寺記』によれば、文明6年(1474年)には郡内の用津院(都留市金井)の開祖である「耕雲」の存在が見られる¹。「長生寺文書」によれば、この「耕雲」は用津院に寺領寄進を行っており、都留市の小山田氏の菩提寺である長生寺(都留市下谷)には、戦国時代の小山田氏当主・小山田信茂が元亀2年(1571年)に同寺に与えた安堵状が伝わっている。この安堵状では歴代の小山田氏当主が与えた寺領が記され、その中に「耕雲」の存在が記され、信長にあたると考えられている。また、『甲斐国志草稿』『森嶋家文書』『森嶋弥十郎其進遺稿』では実名が不詳の人物として「耕雲院公大禅定門」の存在を記し、さらにこの人物の命日を「9日」としており、これが信長にあたると考えられている。

また、

武田氏の滅亡後、天正10年(1582年)6月の本能寺の変により発生した武田遺領を巡る天正壬午の乱では三河国の徳川家康が多くの甲斐衆を懐柔する一方で、相模国の後北条氏に味方する勢力も現れた。『甲斐国志』によれば、6月中旬には**秩父往還**守備していた浄居寺城(中牧城、山梨市牧丘町浄居寺)の大村忠堯(三右衛門尉)・忠友(伊賀守)に率いられた山梨郡倉科(山梨市牧丘町倉科)の土豪・大村党が大野砦(山梨市大野)に籠城して北条方に帰属した⁵。甲斐国では他に筑前原壘を有する甲斐奈神社(橋立明神、笛吹市一宮町橋立)の大井氏も北条方に帰属しており、徳川氏は穴山衆を派遣して大村党を壊滅させた。大村党と穴山衆の合戦は後に『中牧合戦録』としてまとめられる。(ここまで引用)

下線部分の「秩父往還」から続けると田無瀬の秩父大道が、関係してくると思うに至った。

するとこの地に存在する、ゆるぎ(寛城)の小俣氏であるが、

写真1の淡島神社様の道路を挟んだ崖の上、50から60メートルほど上に、大きな民家が一軒建っている。

現ご当主様に伺った事であるが、

- ① 何時の頃か判らないが、よそ者がこの地を通る時には、庭に50から60人位の人数が集まった。今の家の二階に、弓矢等がありそれを使って、敵を迎え撃ったとのことである。
- ② 松姫様は、何処を通ったのでしょうか、伺ったら即座に「家の庭を通り、浅川に向き、その先は、棚頭である。」との答えが即座に返ってきました。伺ったこちらが恥ずかしいような気持ちになってしまいました。

新編小山田信茂論集(4=6月半ば頃発売予定)にも、引用させていただき紹介しましたが、奥山の春日神社、畑倉の春日神社共に、ここの小侯様のご先祖達が、関わっていたのではないかと思える神社由緒に触れられている文章があり、小侯氏の自信に溢れた一言であったと思えてならない。

次に

- ③ ゆるぎとは、の質問には

ひらがなでの表記であったが、いつからこのような漢字になったかは定かでは無い、とのことでした。

大月の歴史を知れば知るほど、凄いところだと感じてしまう自分がいました。

なお、以下は副会長島崎晋一様の聞き取り並びに感想等の紹介になります。

淡島様は魂？が盗まれていたので、30年前に近所の人と和歌山県の淡島神社に伺い魂(赤いお札)をいただいて来たそうです。

*鈴木美良先生の「小山田氏と岩殿城」53頁では

矢壺坂の戦死者の慰霊のため北方裏側の七保町浅川の**大山寺？**に大山不動尊を造頭されたと記載があります。

浅川峠はこの当時(?)も使われていたように思われます。

鈴木美良先生の「小山田氏と岩殿城」では小菅からの道も富士講の道で小菅白沢地内に精進場が有るそうです。

私も松姫様の逃避行について調べた資料を添付します。

天正10年3月10日は新暦1582年4月2日になります。

4つのコース

1, 大菩薩

雪道であることの説明。論集1松本主宰の裏付け

昭和と同じ森林状態であれば、見えやすく逃げるのには不向きか？

*笹子峠の道は森林で人影が見え難い。

2, 桂川添いの道 *1837年地図 大月市史

主街道なので逃避行には不向きか？ **理由は不明。**

桂川の両脇に道があり鶴川の先で合流する。

北側は犬目などを通る。南側は立野（**鎌倉街道裏街道か？**）などを通る。

3, 大月—上和田—小菅

このコースでは 畑倉—小畑—田無瀬—林—瀬戸—上和田

このコースではユルギの小俣さんの庭を通り林に抜け高台を通過して下瀬戸に抜ける。

当然、当時の道は山の中腹を通り山と山の間は下るのでアップダウンがあり、道のりが長いと負担になる。

昨日「ぽつんと1軒屋」の再放送で檜原村の尾根のそば屋を放送していたが、築400年で甲州街道の茶屋？

だったそうで、奥多摩から平地に抜ける道もかなりの山道なので大変です。このコースで逃げた場合は

政治的に危険で無ければ、現青梅などの平地にとどまるような気がする。

4, 大月—葛野—浅川—棚頭—和田峠—八王子恩方

【考察】

・このコースであればユルギは通らないと思われます。

・逃げることに、八王子に行ったことを考えるとこのコースか②の街道が一番考えられる。

ア) 浅川に抜けるのであれば葛野から浅川に抜けるのがこの当時は一般的と思われる。

浅川の入り口の落合地区の下？落合は葛野番地、お宮も御嶽神社？葛野の管轄のようなことの説明を受けた。

*50年前は月が出てれば夜道も歩ける道でした。葛野側（途中に畑がある）は荷車も通れた。

20年前七保公民館で子供と山歩きする催しがあった。

奈良文一館長（元小学校教諭）、小泉春樹先生（元都留高教諭・大月市郷土資料館元職員？）、小俣先生（上平の元小学校教諭）

上記3名の道案内であった。

七保小—小泉—浅川落合—第二次大戦の墓石—大戦の飛行機見張り所—帰宅

小泉先生の説明

鎌倉街道 強瀬より葛野川を渡って葛野—浅川

*小泉登口に出羽三山塔有り。先日溝口様宅に向かう際に小泉側で通行出来無くなっていた。20年前にはイノシシにより道が崩れて、先生方が通れるように最低限の整備をして頂いて通った。落合にも史跡有り説明を受けた記憶がある。

イ) ユルギの小俣さんに昔古地図を見せて頂いた。

田無瀬地区は小俣が原と表示されていた。

*田無瀬地区のほとんどが明治に初代村長がユルギの小俣家で、村役場を現出張所に置いたため近郷から移住されて来た。*元屋はユルギの分家

ロ) 葛野—田無瀬 (林)

1837年の地図では道が繋がっているが橋の絵は無い。浅瀬があるので簡単な渡し木によるものか

ハ) 上平 (瀬戸) —浅川

1837年の地図では道は繋がっていない。3月・4月は水かさが少ないので川は渡れると思うがまともな橋は無い。地形は川は葛野・田無瀬と違って低い位置を流れているが、下りる事は出来る。

二) 田無瀬—浅川

葛野川の東側に道があり、それを上っていくと浅川地区の「指さし地蔵」に行き当たる路があった。地区の方から説明を受けた。

このように、大月市内の各地、各所には思いもよらない歴史が隠れていると思います。大月の歴史、遺産、遺物等々を皆さんで新たに目を向けてお互いに学習し合いませんか。